


UAAとして高大接続に係る一考察

A Research Report on Articulation between High Schools and Universities

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by  **CORE**

provided by Okayama University

岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要

第1号 2016年12月

岡山大学高等教育開発推進室

岡山大学教育開発センター

岡山大学基幹教育センター

岡山大学学生総合支援センター

岡山大学グローバル・パートナーズ

UAA として高大接続に係る一考察

UAA 石井一郎

【要旨】

UAA として岡山大学に赴任して、1 年半になる。高等学校教育と大学教育の接続は、重要かつ喫緊の課題としてその改革が進められている。

まず、国が進める高大接続改革について紹介し、次に、その柱の一つである高等学校教育について本県状況を概観する。最後に、それを踏まえた今後の大学入学者選抜方法を展望する。

【キーワード】

学力の三要素、三位一体改革、高等学校教育、個別選抜

1 高大接続改革

(1) 中央教育審議会答申

平成 25 年に教育再生実行会議から第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」(平成 25 年 5 月)、第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(平成 25 年 10 月)があり、平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申へとつながっていく。「すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせるために」という未来の姿を副題に「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」提言された。

定例の全国高等学校長会総会・研究協議会の場合だったと記憶するが、当時の文部科学省の改革担当者が、「高大接続改革」に対する強い意志を表明された。その生き生きとした姿はとても新鮮に感じられた。その頃、文部科学省は、予算確保がとても厳しいようで、校長にその支援を要請することはあっても、高等学校教育に対して、総合学科を創設した時のような新規施策を強く推し進めることはしばらくなかったからである。

近年、18 歳人口が減少する一方、大学の入学定員は増加し、大学進学希望者はどこかの大学には入れる状況がある。それに伴い、選抜が厳しい大学への進学を目指す高校生を除き、大学入試が高校生の学びのインテンシブとはなにくくなった。大学教育の質保証が問われる中で、大学から、大学生の学力不足は大学入学生の学力低下がその要因であり、大学だけに努力を求められても限界があるという意見が聞かれるようになった。そこから高等学校教育の質保証(「保障」でなくて「保証」であった)が求められるようになった。こうした議論を国が再整理し、教育再生実行会議からの提言につながっていった。

答申で提言されたことは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三位一体の改革

である。そこでは、点数による従来の「公平性」の社会の考え方をも変革すると提言されており、私のみならず、答申の実現に期待をする高等学校関係者は多い。大学進学希望者が多く在籍する高等学校では、「大学入試が示す学力」を身に付けさせることが、高等学校の評価として扱われ、保護者も生徒もそれを期待しているという現状がある。その中で、教員は「真の学力」「確かな学力」を身に付けさせたいと思いつつ、一方で「受験テクニック」を身に付けさせることに時間を割いている。この答申は、そのジレンマからの脱却を示唆する内容であり、期待が持てるものであった。

答申の中で、まず確認しておかなくてはならないのは「学力の三要素」である。学校教育法第30条第2項の小学校の教育において示されているもので、中学校、高等学校にも準用される。この答申では、高等学校教育、大学教育を通じて育む力として、社会で自立して活動していくため必要な力という観点から、学力の三要素の三つ目に工夫を加えて示された。高大接続を考えていく上でこれが基軸になる。

① 学力の基盤となる「知識・技能」

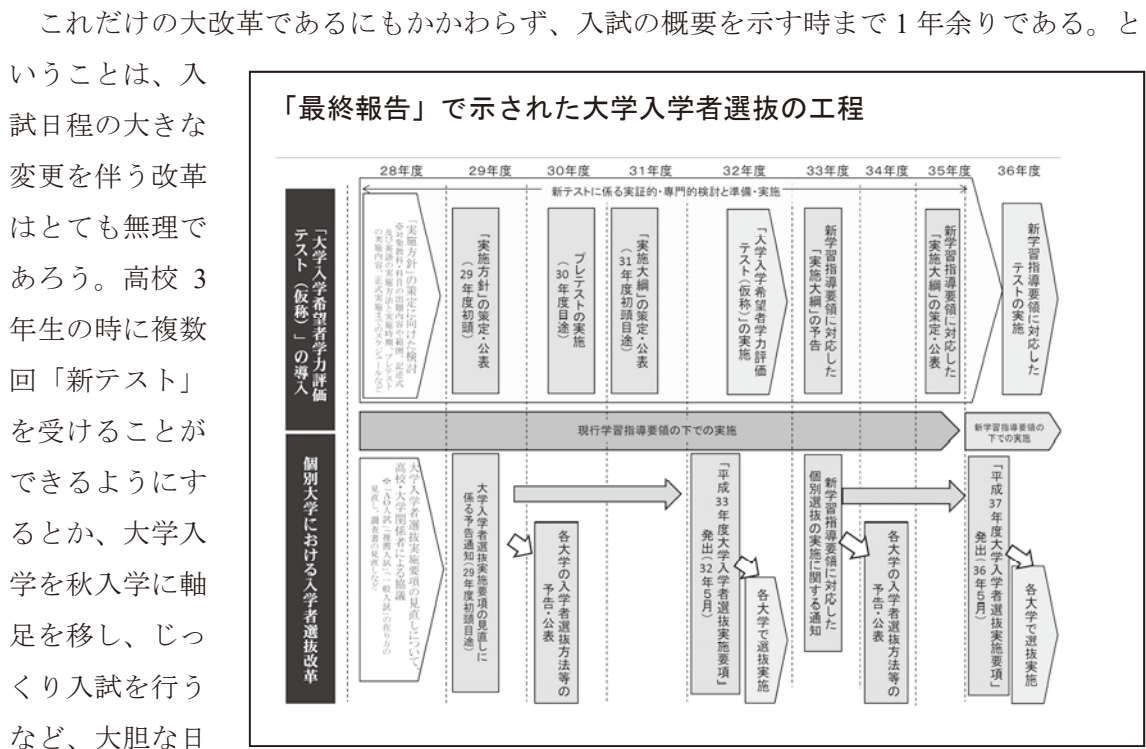
② 知識技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探求し、成果等を表現するために必要な「思考力・判断力・表現力」

③主体性を持って多様な人々と協働した学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）

答申では、これらを高等学校、大学教育、大学入試において一貫して育成しようと提言している。そして、そのために求められている学習・指導方法が、高等学校教育、大学教育で共通して求められており、それがアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善である。社会の注目を集めたのは、高等学校での「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」（以下「新テスト」と言う。）であったが、それも含めて、「学力」についての新たな認識を学校教育に携わる者すべてで共有することを促していることが重要である。

（２）高大接続システム改革会議「最終報告」

答申に続く平成27年1月の高大接続改革プランを受けて、実現に向けて具体的方策を検討するために高大接続システム改革会議が設置された。そこで、平成28年3月「最終報告」がまとめられた。その工程表では「新テスト」について平成32年度から実施となっている。つまり、平成33年度入学生に対する個別試験からである。さらに工程表では、その3年前に当たる平成30年度の早いうちに「各大学の入学者選抜方法等の予告・公表」を行うこと、大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告通知を、平成29年度初頭を目途に行うこととなっている。現在、文部科学省ではこの工程表に沿って、検討が進められている。平成33年度入試から「新テスト」を実施することは確定している。



高等學校が、入試日程が早まることを警戒する理由は大きく二つある。

一つは、授業時数が減るということである。現状でも3年生は1月以降、教科書を用いた授業はできない。12月までが限界であるが、理科などは教科書を終えるのがやっとである。一般入学者選抜の学力試験に向けた演習は、大学入試センター試験後に行っている。入試日程が早まれば、そういった科目の授業時数を早めに確保しなければならないが、その時間を見出すのは難しい。

もう一つは、教育課程外の活動に影響するということである。3年生も6月までは部活動している生徒が多い。野球部やインターハイ出場者は7月、8月に大会がある。そこから受験を意識した勉強が始まるが、成果が現れてくるまでに数か月かかる。それで何とか入試に間に合わせている。部活動など、教育課程以外の活動による人間的成長はとても大きく、その縮小は教育の後退となる。一方で、部活動などの時間を確保すれば、受験に間に合うだけの勉強時間の確保に、生徒も保護者も不安を感じることになる。

「新テスト」の内容については「記述式問題」が大きな課題となっている。高校生から見ると自己採点がどうなるのか不安な点だが、あまり論じられていない。マーク式で実施される試験についても、思考力などを問うよう工夫されるということだが、どう工夫されようとも、あの限られた時間の中で、あれだけの量の問題を「マーク式」で解答するためには、受験生はしっかりと訓練を積んでおかななくてはならない。その時間が膨大であることは「新テスト」においても変わらない。

「個別試験」については、「主体性・多様性・協働性」を中心に測ることとされ、調査書、面接、活動報告書、学修計画書などの活用が提言されている。これは「新テスト」で大学入学後必要な「教科の学力」は基本的にすべてカバーするということであり、例えば「数学Ⅲ」なども出題されるということなのか。また、筆記試験が「新テスト」のマーク式中心となれば、表現力の低下につながるように思うのだが。これからも、これまで同様「個別試験」は学力試験が中心になるし、その中で「学力の三要素」をどうやって測り、「高大接続」を進めていくのか議論が進むと思われる。

2 高等学校教育

(1) 岡山県高等学校教育体制整備

岡山県の高等学校教育は、社会の進展や価値観の多様化に対応して、その時々で改善・工夫が進められてきた。

制度面からみると、戦後の様々な改革の中で高等学校教育を最も抜本から見直したものが、学区制・総合選抜制度の変更であった。平成11年度の高等学校入学者から適用された。大学進学を前提としたカリキュラムを持つ普通科については、戦後一貫して、県内どこでも平等にその教育が受けられるよう、岡山学区、倉敷学区では総合選抜を実施し、県内すべてで小学区制を堅持していた。

しかし、個性を伸長する教育が求められるようになり、人口の都市部への集中と相まって、高等学校の普通教育の大きな転換が求められた。新タイプの高等学校として、玉野光南、総社南、岡山城東が設置された後、大学進学をミッションとするすべての普通科に大変革をもたらす提言が、平成2年に出された（高等学校教育研究協議会答申）。

平成7年度から3年間に渡って入学者選抜方法検討委員会で検討が進められ、漸次、入試方法を変更し、平成11年度の入学生に対する選抜から現在の6学区、単独選抜となった。

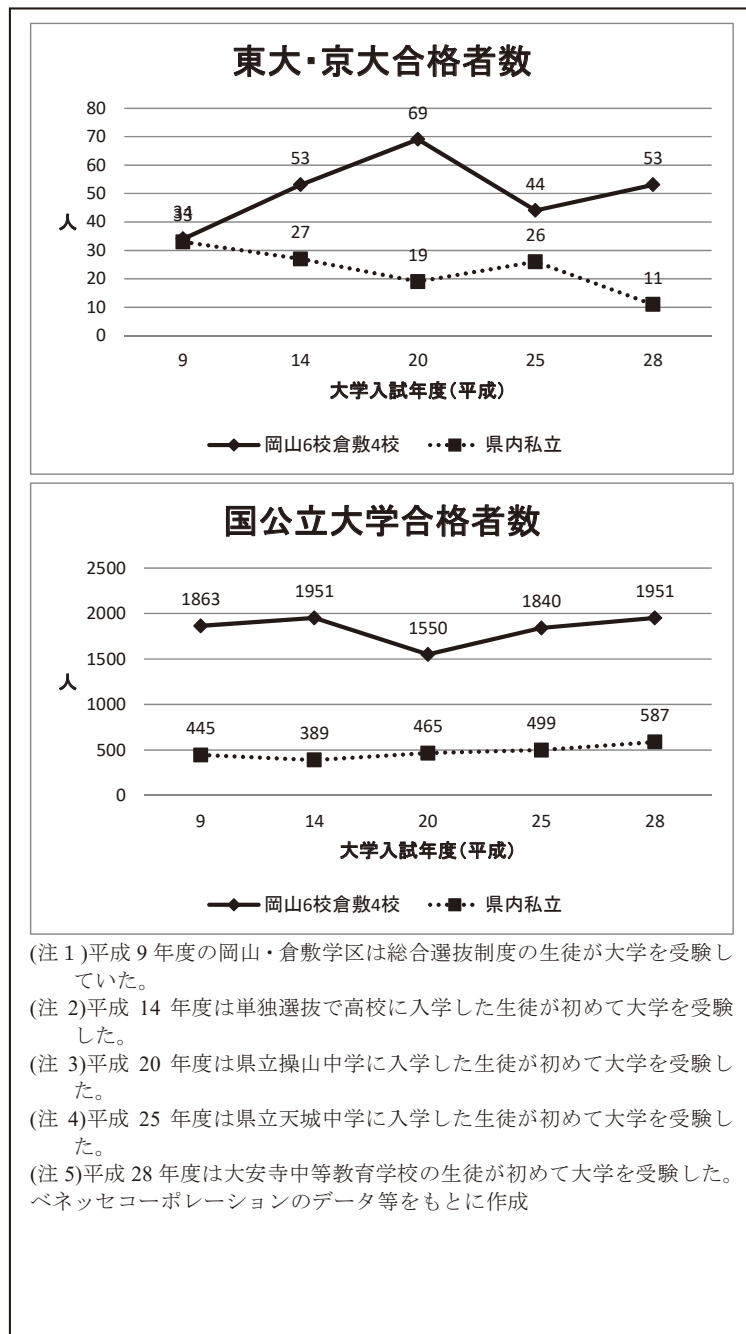
その目指すものは、偏差値偏重の教育になりがちな制度から、生徒一人ひとりが、自らの学習ニーズに合った学校選択を可能にするものであり、そのことによって、生徒の主体的に学ぶ意欲を喚起することにあった。そのことを実効あるものとするため、入学者選抜方法、高等学校の特色づくり、中学校での進路指導の改善が同時に進められた。規模は全く異なるが、現在進められている高大接続改革と三位一体の改革という点は同じである。

この特色づくりの文脈で、岡山一宮の理数科などの普通科系学科やコースが設置され、さらに岡山操山、倉敷天城の県立中学校併設、岡山大安寺の中等教育学校移行と進んでいく。

三位一体改革の成果の検証を数値で測ることは極めて困難である。岡山大安寺中等教育学校の生徒は、平成 28 年 3 月に初めて卒業生を出した。6 年一貫教育を総括し、今後に生かしていくのはこれからである。これからが充実期である。単独選抜になって、すでに 20 年近く経過している。この間、科学技術の進展など、教育環境は常に変化している。教育の成果は、社会人としてどのように生きているかなどを見ていくのが本来であろうが、あまりに時間がかかりすぎる。分かりやすい指標として、目先のことにはなるが大学進学状況がある。しかし、それについても私立高等学校の学校経営や国や県の施策も常に変化していて、進学状況に影響するものは多岐にわたる。例えば、私立高等学校の中には、極端なコース制をとり、一部生徒に特別の受験勉強の環境を整備し、進学実績を積み上げた高校もでてきた。

このたびの高大接続改革も時間がかかる。平成 33 年度入試から新テストが実施され、個別試験が新しい姿を見せたとしても、そして大学教育が教育課程も指導方法も工夫されたとしても、学生がその課程を終えるには 4 年にかかる。新学習指導要領で学んだ高校生が受験するのは平成 37 年度であるし、その卒業までにはさらに 4 年は必要である。高大接続改革が形を整えるまでに 10 年は必要である。

したがって、たちどころに課題が解決され、目に見えて成果が上がるというような劇的な変革を期待してはいけない。改革の目指すところを念頭に、その時その時で最良の効果



をあげられるようにしていくという姿勢が重要である。

(2) 探究的な活動の現状

次に、本県の高等学校教育について紹介する。ここでは、本学入学生の3割を占める本県の高等学校卒業者がどのような教育を高等学校で受けているかを、探究的な活動を中心にしてみる。こうした活動を経験した生徒がすでに岡山大学に入学しているし、今後さらに増えていく。現状を把握しておくことは重要である。

○ スーパーサイエンスハイスクール (SSH)

現在、県立4校私立2校の6校がSSHとして文部科学省から指定されている。県立高等学校はいずれも理数科が設置された高等学校である。そのため、入学時から普通科とは異なる教育課程が可能であり、理数数学など理数科独自の科目が開設されている。理科教室や理科の教員が多く、環境が特別に整備されている。

例えば、倉敷天城高等学校理数科では、理数専門科目が週15時間程度ある。1年次から全国生徒課題研究発表会などを参観し、2年次では、様々な研究発表会に出場する。研究も先輩から後輩へと受け継がれ、内容の深いものとなっている。その影響が普通科にも大きい。

○ スーパーグローバルハイスクール (SGH)

県立2校と私立1校が文部科学省から指定されている。平成26年度からの事業であり、まだ卒業生は出ていない。

2 科学技術系人材を育成するための理数教育の推進		SSH
<p>岡山一宮高校 (科学技術イノベーションを創出できる人材を養成) 科学技術イノベーションを担う人材を育む岡山一宮メソッドの確立</p> <p>高い専門性と広い汎用性を有し、科学技術イノベーションを創出できる有能な人材を養成するために、俯瞰的な認識・思考や科学的な創造を可能にするオクトスキルズ(8つの能力)を育成する。</p> <p>〈8つの能力〉 観察・実験力 情報処理活用能力 論理・創造的思考力 コミュニケーション力 ディスカッション力 フィシリテーション力 チームワーク力 基礎基本的学力 (豊かな学力)</p>  <p>韓国慶南科学高校との交流 フィリピンスタディーツアー</p>	<p>倉敷天城高校 (地域の理数教育の拠点校として) 科学の世界をグローバルに牽引する「サイエンスクリエイター」の育成</p> <p>中高6か年を見通した課題研究プログラムを改善するとともに、学習評価やクロスカリキュラムの研究開発を行う。また、大学との連携により、ハイレベルな研究力の育成と国際的なコンテスト入賞を目指す。</p>  <p>米国の姉妹校で科学交流 課題研究</p>	
<p>玉島高校 (ものづくりで発想力や創造性を育む) 日本再生に必要な科学技術イノベーションを支える地域の才能を見だし、個に応じた学習による才能育成システムの研究開発</p> <p>高校生が実施する科学フェアを通して、地域の小中学生とSSH校をつなぎ、全教科における個に応じた学習、ものづくりを取り入れた学校設定科目等による、科学技術系人材の素養を育む研究開発。</p>  <p>学校設定科目「科学と工学」の授業 科学プレゼンテーション講座</p>	<p>津山高校 (自然科学研究をリードするグローバル人材の育成) 科学部を含めた探究型カリキュラム開発及び研修プログラム開発</p> <p>科学部を活用したカリキュラムの枠を超えた指導を行い、自然科学研究をリードするグローバル人材の育成を目指す。また、全校生徒を対象に探究型カリキュラムと課外活動プログラムを実施する。外国人指導者4名による英語指導により、英語での発表を目指す。</p>  <p>臨海実習 課題研究(英語で発表)</p>	

岡山県高等学校教育研究協議会第二専門委員会報告「参考資料」から抜粋

例えば、平成 26 年度に指定された岡山城東高等学校では、学校全体、全生徒が岡山大学と連携して探究的な活動に取り組んでいる。「異力を統合してグローバルな課題について探究」している。「異力」とは岡山城東高等学校の 4 つの学類である、人文、理数、国際教養、音楽で培っている専門的な力のことである。多様な力を合わせて取り組むことにな

3 グローバル人材の育成に向けた教育の充実

SGH

岡山城東高校 ステージは『世界』だ！ ―異力を統合する城東システムの開発―

- SGH 課題研究
 - ・主体的に考える態度の育成/チーム力の育成/コミュニケーション能力向上/プレゼンテーション能力向上
 - ・ GLOBAL I : 探究活動のための基礎的な知識・技能の習得
 - ・ GLOBAL II : 学類を超えたチームで本格的な課題研究
 - ・ GLOBAL III : 海外進学も視野にした高度な課題研究 (選択科目)
 - 課題研究発表会 (1・2 年全員) の実施



GLOBAL I ポスターセッション

- 学類での専門性
 - ・ 知的好奇心の喚起/専門性の深化/思考力・判断力・創造力の養成
 - ・ 学類コア科目

- 海外での体験活動
 - ・ 知的好奇心の醸成/学習意欲の喚起/海外進学意識の向上/異文化への理解/語学力の向上
 - ・ 海外修学研修 (選抜チーム) ・ 学類研修・海外文化体験研修

⇒ グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を育成

岡山操山高校 「和して流れず」の精神で、岡山と日本の未来を切り拓くグローバル・リーダー

- グローバル・リーダーの 5 つの資質・能力
 - ・ 幅広く深い教養/課題解決能力/コミュニケーション能力/リーダーシップ/社会貢献の意識
- 3 つの研究開発単位の相乗効果による 5 つの資質・能力の向上
 - ・ 未来航路 : 系統的・発展的な課題研究による全校生徒の資質・能力の向上
 - ・ SOZAN 国際塾 : 専門的な課題研究や海外フィールドワークによるグローバル・エキスパートの育成
 - ・ GLOBAL STUDIES : アクティブラーニングや CAN-DO リストに基づいた授業で全校生徒の資質・能力の向上
 - ・ 5 つの資質・能力を観点としたルーブリックによる評価を行い、取組を改善



⇒ グローバル・リーダーとして必要な 5 つの資質・能力を中学・高校 6 年間で育成 未来航路 岡大医学部ドクターによる指導

岡山県高等学校教育研究協議会第二専門委員会報告「参考資料」から抜粋

る。1 年次「GLOBAL I」2 年次「GLOBAL II」3 年次「GLOBAL III」が科目として設定され、1 年次、2 年次は必修科目となっている。1 年次では、探究的な活動とはどういったものかを学習する。文献を引用する際のルールを知り、レポートを作成し、ポスターとパワーポイントでプレゼンテーションを行う。海外での経験を積む機会も多くあり、1 年次の夏休みにはイギリス、カナダで語学研修があり、2 年次は「学類研修」で、韓国やマレーシアに行く。また、2 年次の終わりには、セレクションを経てイギリスの研修があり、課題研究に磨きをかけ、3 年次での課題研究につなげる。今年度、倉敷市での G7 教育大臣会合にも「GLOBAL III」の選択生が参加し、発表やフロアーからの質問を英語で行っていた。

○ その他

SSH や SGH 以外でも探究的な学習が増えている。

例えば、岡山朝日高等学校では科学部の生徒がチャレン

- 第 12 回全国物理コンテスト「物理チャレンジ 2016」
 - 金賞 岡山朝日高等学校 2 年生
 - 金賞 倉敷天城高等学校 3 年生
 - 銀賞 岡山朝日高等学校 2 年生
 - 化学グランプリ 2016
 - 大賞 岡山朝日高等学校 2 年生
 - 金賞 倉敷天城高等学校 3 年生
 - 銅賞 津山高等学校 3 年生
 - 日本生物学オリンピック 2016
 - 敢闘賞 倉敷天城高等学校 2 年生
 - 第 10 回全国高校生英語ディベート大会 in 岐阜 (2015)
 - 第 5 位 岡山城東高等学校 (全国代表 66 チーム)
- (岡山県教育庁高校教育課ホームページから抜粋)

じし、物理オリンピックや科学オリンピックで全国トップの成績を上げている。

倉敷青陵高等学校では、総合的な時間を活用し、全員が課題研究に取り組む。

岡山芳泉高等学校では、授業でのアクティブ・ラーニングを推進するとともに、総合的な学習の時間に課題研究を実施している。

倉敷南高等学校は、地域と連携した活動を推進している。カンボジアでの研修も実施している。

各高等学校それぞれに、特色ある探究的な活動が行われている。

(3) これからの学習指導要領が目指すもの

次期学習指導要領のキーワードは「アクティブ・ラーニング」である。中央教育審議会への諮問の中で使用され、注目を集めた。昨年末、中央教育審議会から「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が示された。答申では「次期学習指導要領が目指すのは、学習の内容と方法の両方を重視し、子供たちの学びの過程を質的に高めていくことである」とされている。つまり、「何を学ぶか」という学習内容とともに、「どのように学ぶか」という学びの過程を改善していくということである。そして、学びの質を高めるためには「主体的・対話的で深い学び」を実現することが必要であり、そのために共有すべき授業改善の視点として「アクティブ・ラーニング」が位置付けられている。その方向性は、現学習指導要領のもとにおいても、高等学校の学習・指導方法の改善の中で急速に意識されつつある。また、その代表格である探究的な活動も増えている。

こうした改善をさらに進めていくには、実効あるものにするためには何が重要か。岡山大学に進学してくる高校生が在籍する高等学校に関していえば、大学入試に成果がにつながるかどうかは極めて重要である。なぜならば、こうした高等学校の教員は、日々の授業の成果として、校外模試での他校との比較、他教科との比較にさらされ、保護者の大学入試に対する我が子の成果を期待され、その意味で成果を出せるような授業を実践することを求められている。学習・指導方法の変革がその観点からも成果が出ることを示されなければ改革の風は本物とはならない。

高等学校での授業は、生徒が机について、教員がとうとうと語る、あるいはひたすら板書することに耳を傾け、ノートをとっているイメージを持たれることがある。しかし、実際にはかなりの時間を演習などに割き、生徒が能動的（アクティブに）学習できるよう様々に工夫してきている。それは、そのことで（受験）学力が向上すると教員が経験的に確信し、生徒が教員の指導を信頼しているからである。教員は、（受験）学力を物差しとして授業方法の最適解を見出し、実践している。そこからさらに進んだ「アクティブ・ラーニングの視点からの授業」を実践するには、これからの最適解はそのことによって得られると信じられるものが必要となる。学習・指導方法の改善には、高等学校の管理職やミドルリーダーの役割はもちろん大きいですが、大学入学者選抜が、高等学校での学習・指導方法の改

善をしっかり受け止めるものであることが極めて重要である。

3 今後の高大接続の展望

(1) 高等学校での進学指導

県内の本学に多くの生徒を入学させている高等学校の進学指導に関する3年間のスケジュールは共通しているところが多い。

まず、考查、模試がある。そこを目指して教科指導が進められる。また、生徒にとっては、そこが自分の進路を考える機会となる。定期考查が、5月、7月、10月、12月、2月（3年生を除く）にある。1、2年生全員参加の校外模試が、7月、11月、1月にある。2年生の2月からマーク模試が始まる。3年生全員参加の記述模試とマーク模試がひと月1回ペースで続く。また、2年生の後半から、大学オープン模試、ハイレベル模試、小論文模試など、希望者が参加する模試がある。さらに校内実力考查が2年生で3回、3年生で4回程度実施される。

校外模試は他校との比較ができる点で重要である。教科の指導の成果が数字で比較される。国語、数学、英語の教員は1年次から他校との競争にさらされ、地歴公民、理科の教員も1年次後半からはこの競争に加わる。上級学年の成績とも比較される。教科では、考查や模試の結果を踏まえ反省会があり、効果的な指導方法を工夫する。

高大接続システム改革会議から「高等学校基礎学力テスト（仮称）」が提案されたが、2年生では、定期考查年5回、実力考查3回、校外模試4回が実施されている。さらにこれにこの全国規模のテストが加わるとどうなるか。学習方法・指導方法の改善もテストの目的とされるが、義務教育とは異なり、すでに様々その材料はある。校外模試では、生徒一人ひとりについて、学習が不足している分野などもフィードバックされる。この基礎学力テストの活用が、選抜の厳しい大学を目指すことのない高校生を対象とするものになるのも当然である。

生徒の学習の状況を把握するため、学習実態調査が年に2、3回実施される。生徒の学習時間は1、2年生で3時間程度になる。よく指摘される高校生の学習時間の低下は、選抜の厳しい大学を目指す生徒には必ずしも当てはまらない。生徒は、授業終了後、部活動などを行っており、日々非常にタイトな生活をしていることになる。最近問題となるスマホも30分程度である。もう少しゆとりをもって、じっくり物思いにふける時間があっても良いと思うが、現実には厳しい。つまり「何もすることがない時間をどう使うか」について悩む経験することなく大学生になる。大学生になって日々の生活時間の自由度が一気に高まり、戸惑う者も出てくる。

保護者会は全学年7月にある。12月にも行われることもある。学習や学校生活の状況、長期休業中の過ごし方、進路選択などについて話し合われる。3年生の12月、1月は受験校について話し合う。1、2年生の7月については10月までに次年度の選択科目を確定す

る必要があり、それに向けた話し合いもある。

土曜日は午前中を中心に、講演会や講座、自習のための教室開放などがある。平日も、進路意識を高めるキャリア講演会がある。さらに学校行事として、東大や京大のキャンパスツアーも高校で実施している。岡大訪問もある。また、当該校の卒業生が、後輩に向けて話をする会もある。大学生、社会人としての様子や、そこに至る経験を語る。

授業に加え、学校行事や部活動など、教員も生徒も忙しい毎日である。

各高等学校ではどのような進路指導が行われているのか、平成 28 年 8 月末から 9 月末にかけて 3 校の管理職と進路担当の先生からお話を伺った。

○ 岡山県立岡山朝日高等学校

岡山朝日高等学校では、東京大学、京都大学、医学部への意識づけを強力に推し進める。「教養講座」で東京大学から講師を招く。東京大学の先輩の話を聞き、意見を交換する。「本物」に触れてもらいたいと、様々な分野の研究で活躍する卒業生の講演を実施する。明治 7 年創立、140 年の伝統と実績を生かしている。グローバル人材の育成では、英語による科学講義、イギリス・サイエンスカレッジ授業体験（3 月、希望者）などを実施する。

進路指導の柱は、東京大学、京都大学の個別学力試験を意識した学習指導である。教員は、東京大学や京都大学の入試問題の分析や指導方法について、教科の中で研修に努める。その成果を日々授業や定期考査・実力考査、ガイダンスなどで生徒に伝える。例えば、当日生徒に配付されたプリント「8 月 25 日（木）東大・京大ガイダンス（数学）」では「論理のごまかしや飛躍はアウト」「問題を見る目を鍛え、解法や難易度を見抜けるようになる」などと書かれていた。

大学入試センター試験にとらわれず、個別試験に対応できる学力をつける。時間をかけて考えることに力点を置く。推薦・AO は勧めない。部活動や主体的な活動（コンクールなど）を推奨する。3 年生も学園祭に熱狂して参加する。補習科も視野にいれ、3 年間で入試に対応する力を完成させることに固執しない。

○ 岡山県立岡山芳泉高等学校

岡山芳泉高等学校は、平成 26 年度に国立教育政策研究所の研究指定を数学科で受け、アクティブ・ラーニングの視点に立った工夫を行なった。公開授業で多くの助言が得られ、いわゆる受験学力も向上した。それで他の教科でも取り入れられ、多くの教員が実施するに至った。

数学の「空間ベクトル」授業見学を行った。習熟度別授業で、人数も少なめで、プロジェクターも使いながら、生徒同士の話し合いも含めて授業が構成されている。

もともと岡山大学希望者が多い高校である。最近は「難関大学指導」にも力を入れる。東大、京大キャンパスツアーのほかに、「難関大学」についての、説明会、講演会、合宿な

どを取り入れている。

生徒の探究的な活動も1年生でグループ研究、2年生で個人研究を取り入れる。入学時には、おとなしく、内気な生徒だが、探究的な活動では積極的に発言すると聞いた。探究的な活動の成果が生きていると感じた。

○ 岡山県立倉敷青陵高等学校

倉敷青陵高等学校は岡山大学希望者が多い高校である。倉敷学区普通科では、現役で国立大学に合格することを希望する生徒が多く、進学指導もそのニーズに応えるよう進められる場合が多い。しかし、倉敷青陵高等学校では、最近、「現役合格」を進学指導の方針からは外したそう。画期的である。そのことにより、進学指導が目指す時間的ターゲットが、「大学受験まで」から「大学受験とその後」に変えることができたそう。

また、岡山大学で満足することなく、岡山大学以外の大学にも選択肢を広げる「志望を高め、貫かせる指導」を進める。1年生の夏休みに企業訪問”Future Watching”を実施する。2学期には本学の全学部の教員が大学での学部・学科について説明する。社会に出て求められる力と大学での学びを踏まえた文理選択・科目選択につなげている。

(2) 高等学校から見た岡山大学

岡山大学は、中国・四国地区の高校生にとって最も入学したい大学の一つである。とりわけ岡山県内の多くの高校生にとっては憧れである。高等学校入学時点で大学進学を目指している生徒はまず岡山大学を第一志望とすることが多い。大学の名前をあまり知らない段階とはいえ、岡山市、倉敷市の旧総合選抜校であれば7割、8割はその状態である。何が魅力か。なんといっても国立である。つまり、学費が安く、教育がしっかりしていて、研究も優れている。広々していて閑静で、落ち着いている。勉強できる人が入学している。合格すれば自分もその仲間になれるし、親も誇りに思ってくれる。

岡山大学の教育改革は高校生にどう見えるか。

岡山大学を第一の目標としている生徒にとっては、岡山大学がどういう改革に取り組んでいるかより、どうすれば合格できるかが問題である。もちろん、改革が見えればさらに魅力は増す。一方で、県内の高校生で、旧帝大や神戸大学、広島大学と比較する生徒にとっては、入学者選抜方法や学べる内容、卒業後のことはもちろんだが、教員や学生の学びへの姿勢や大学の雰囲気も気になるところだ。こうした生徒に岡山大学の教育改革の本気度を見てもらいたい。また、他県の高校生で地元の国立大学と比較する生徒にも見えるようにしていきたい。

まず、60分・4学期制について、60分と言われても高校生にとっては50分授業が日常であり、特にインパクトはない。4学期制と言われても、多くの高校は3学期制で5回の

定期考査を区切りとしている。あまり違いを感じない。「学びの強化」はどうか。岡山大学を他の国立と比較する生徒は、とてもタイトな厳しい日常を過ごしている。「学びの強化」から受けるところは魅力になりにくい。つまり、60分・4学期制の意味するところとその成果を高校生に工夫して伝えることが大切になる。

60分による改革の成果は、学生の成長が一番であるが、明確にできるのは授業での指導方法の改善状況であり、学生の学修時間であろう。教員の意識と意欲とともに、学生が大学生らしく学ぼうとし、学生からその環境を教員に求めることも必要である。教員・学生が目指すところを共有することが大切である。60分・4学期制は他大学がまねできない改革である。広くその意義共有し、成果を出し、高等学校に広め、改革にふさわしい学生の入学につなげたい。

次に、大学入学者選抜を高等学校はどう見えているか。

高校生は、まず大学入試センター試験でボーダー以上の点を取ることに全力を注ぐ。一般入試では大学入試センター試験の割合が高いので、そこで失敗をしないことが大切である。個別学力試験は特別の発想を求められるものではないが、取るべきところでしっかり点を取るように指導される。普段の授業にしっかり取り組み、努力を重ねる生徒が合格する。

岡山大学の推薦・AOは国立の中では割合が高い。それをどう活用するかは高等学校の進学指導の方針で異なる。推薦・AOは2学期に行われるが、受験勉強に覚悟をもって取り掛かるのは夏休みからであり、この時期はまだまだ受験学力が伸びつつあるときである。生徒が、大学入試センター試験を目指して最も努力している時期にそれを中断させたくはない。大学入試センター試験でしっかり点を取れば大学の選択肢も広がる。したがって推薦・AOをあまり勧めない高等学校も少なくない。推薦・AOにふさわしい実績や特徴を持つ生徒、前期での合格が学力的に難しい生徒、伸びがあまり期待できそうにない生徒には受けるよう勧めることもある。

国際バカロレア入試は、大多数の高校生にとっては関係がない。国際バカロレアは特別の教育である。さらに今後、募集枠が広がれば、それ以外の募集人数が削られることになり、高校生にとっては良いことはない。

アドミッションポリシーは残念ながらあまり見えていない。アドミッションポリシーで求められている人材になろうとするより、入試で少しでも得点を取る努力の方が合格に直結するからである。

(3) 生徒の成長と高等学校教育改革を促す入試

最後に、大学入学者選抜の改革である。

まず、しっかりと押さえておきたいことは、このたびの改革は「高大接続」が基軸にあ

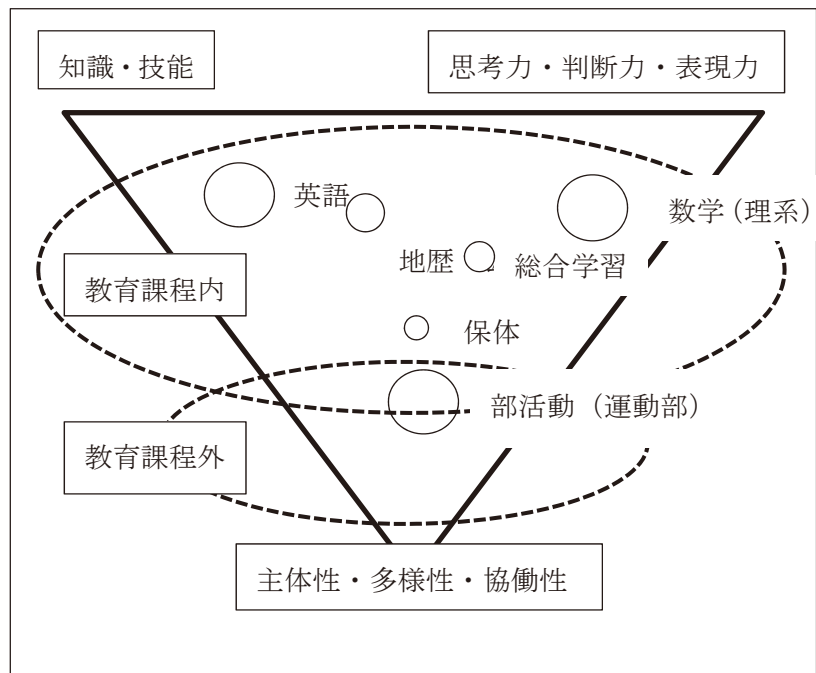
ることである。これまでも「高大連携」が進められ、高校生が大学での学修に触れる機会の提供や、高校生が大学の教育、研究資源を活用する機会が積極的に設けられてきた。しかし、今進められようとしている改革は次元が異なる。中央教育審議会のいわゆる高大接続答申（平成26年12月）の提言は、高等学校教育も大学教育も、これからの時代に生きる人材の育成をするものになっていないという認識に立っている。これから求められる学力は「学力の三要素」であり、高等学校教育改革、大学教育改革、大学入試改革を一体的に進め、育成せよと提言している。

このことを踏まえ、岡山大学の入学者選抜改革の基本的な考え方は、高等学校教育改革を踏まえかつ促すものであること、岡山大学の教育改革「躍動的な学び」を推進するものであること、いわゆる高大接続答申の提言に沿ったものであること、になろう。ここでは基本的な考え方を踏まえ、高等学校教育の視点から大学入学者選抜について考える。

まず、高等学校での学びについてである。

教科等の学習状況と評価について見ていく。

図は、岡山大学への入学希望者が多く学ぶ高等学校を想定して、そこでの教科等で身につく力を「学力の三要素」を物差しとして配置したものである。どこに配置するかは、生徒観や指導観によって異論も多々あろうが、一つのモデルとして、一部の教科等を提示した。



教育課程内に位置付けられる学びと、教育課程外の学びがある。教育課程内では、国語、地歴・公民、数学、理科、保体、芸術、英語、家庭、情報、総合的な学習の時間、特別活動がある。その他、専門教科や学校設定教科を開設する学校もある。総合的な学習の時間には、活用力を付ける活動や探究的な活動が行われる。特別活動には、学校行事や生徒会活動がある。教育課程外では、部活動、学校外でのクラブやレッスン、資格取得、競技会やコンテストへの参加などがある。

また、○の大きさは、生徒の費やす時間の大きさを表している。数学（理系）、英語は3年間ほぼ毎日授業があり、授業以外での学習時間も多。部活動もほぼ毎日あり、かなり

の時間をかけている。地歴・公民は、2年生以降はほぼ毎日授業がある。体育は週2～3時間、総合的な学習の時間は週1時間が標準である。

評価について、学力を測る資料を表に示す。

学力を測るための資料	
地歴・公民	定期考査、提出物など、実力考査（2～3年）、校外模試（2～3年）
数学	定期考査、提出物など、実力考査（2～3年）、校外模試（1～3年）
保体	授業での関心・意欲、技能など
英語	定期考査、提出物など、実力考査（2～3年）、校外模試（1～3年）
総合学習	レポートなど
部活動	活動成績、成果物、発表会など

国語、地歴・公民、数学、理科、英語については、定期考査での結果が評価の大きな割合となる。それに提出物などが資料となる。これらの資料を基に、各教科の目標に照らして観点別に評価がなされ、そこから評定が算出される。観点は、教科によって多少異なるが「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」「技能」「知識・理解」が主なものである。

校外模試は、大学入試に向けて、生徒が自分の学力を図るために任意で受けるものであり、学校の教育活動とは一線が引かれている。実力考査も大学入試に向けてのものであるが、授業での学習を踏まえており、学校の教育活動として位置付けられている。ただし教科の評定の資料とはならない。

教科である保体、芸術、家庭、情報については定期考査が実施されることもある。授業での関心・意欲、技能、作品なども資料となる。総合的な学習の時間の評価は文章標記である。どういうことにどういう姿勢で取り組んだかなどが記載される。特別活動は、実質としては出席状況が資料となる。

部活動、学校外での活動については評価の対象としない。学校として把握できる顕著なものがあれば生徒指導要録にその事実が記載される。

以上のことを踏まえて大学入学者選抜について考えてみる。

第一に一般入学者選抜と特別入試（推薦・AO）との割合について、第二に個別学力試験について、第三に特別選抜についてである。

第一の入学者選抜と特別選抜との割合については、高校生の学びの時間量を踏まえたものが望ましい。東京大学や京都大学のように、一般入試が入学者選抜の大部分であれば、受験勉強に多くの時間を費やした生徒の入学が多くなり、逆に、特別選抜の割合が多ければそれだけそこに時間を費やした生徒の入学が多くなるのは当然である。岡山大学に入学してくる平均的な生徒は、学校での授業6時間のうち5時間は国語、地歴・公民、数学、理科、英語であり、授業以外の学習をほぼ3時間行い、その多くがこれらの教科の学習で

ある。50 分×5 授業時間+60 分×3=430 分である。これらの学びの成果は学力試験で測ることが適当である。一方、総合的な学習の時間、特別活動、部活動はほぼ毎日あり費やす時間は 120 分程度である。これらの学びの成果は、学力試験以外の様々な指標で測ることが適当である。これを特別選抜の割合として、その割合は 2 割程度である。現在岡山大学で実施している推薦・AO の割合は約 2 割であり、妥当で根拠がある。ここでの議論は、生徒一人ひとりの学びの時間配分と、募集人員の割合とを結びつけるものであり、この二つが必ずしも直接リンクしていないことは留意しておく必要がある。しかし、入学者選抜から発する高校生へのメッセージとしては大きいと考える。

第二に、個別学力試験についてである。高等学校では、現在、次期学習指導要領も視野に、アクティブ・ラーニングの視点に立った学習・指導方法の改善が進み始めている。まだ、学校によって差が大きいが、研究、研修、実践などの取組は熱を帯びてきている。そこで目指しているのは「深い学び」である。それは、知識・技能の定着と活用力の育成を主眼としている。したがって、これからの個別学力試験の問題も、その方向に沿って工夫されたものが望ましい。思考過程や活用力に重きを置く工夫である。少しの工夫であっても高等学校への影響は大きい。これらは、選択形式が中心の「新テスト」では問にくい。少し暴論になるが、一般入試は個別試験のみとすることも考えられる。「新テスト」も良問が出されると思うが、マーク式試験の対策に費やす膨大な時間を「深い学び」に振り向けてはどうだろうか。

個別学力試験の科目数の限界を補うために、「新テスト」でなく、調査書の評定を活用してはどうか。調査書の評定は、学習目標に照らしてつけられるものであり、他の生徒や他の学校との比較を目的とするものではない。しかし、学校内での教科間のバランスはある程度取れていると考えれば、学力試験での教科の結果と組み合わせれば活用できる。高校生に、授業を大切にすることを促すことにもなる。

第三の特別入試については、学力試験で測りにくい「主体性・多様性・協働性」などを重視して行うことが望ましい。それは高等学校での探究的な活動や、主体的な活動、協働的な活動、学校外でのボランティア、コンテストや各種検定へのチャレンジを促すことになる。これらのことから身に付ける力は、人間的な成長の上で極めて重要である。

大学に多様性をもたらす意味でも特別選抜は重要である。そのために、様々な指標があってよい。例えば、発掘・育成型入試も考えられる。現在、「高大連携の取組」の中で、大学教員が、直接高校生を指導する場が多々ある。これはと思う高校生には、大学の研究室での学びなどを通して大学の魅力を伝え、大学での学修をリードする人材として入学を促してはどうか。また、高等学校での学習評定を資料の中心とする入試も考えられる。評定平均 4.5 以上で、数学、理科、英語については上位 5%以内を条件に推薦をしてもらうことはどうか。学校ごとの評定の差は承知の上だが、評定が高い生徒は意欲的な学習を積み重ねていることは間違いない。もしどうしても心配なら「新テスト」での最低点を示すこ

とも考えられる。横道にそれるが、本来共通テストは高等学校での必修科目の定着度を測ることに適しており、あまり目的を広げると無理が出てくるように思われる。

以上、高等学校教育から大学入試を考えてみたが、そもそも「高大接続」の議論は、少子化による大学入学者選抜の機能不全と、それに伴う大学入学生の学力低下、その対策への過度の負担や限界が発端であった。大学で教育することが困るような学力ならば合格にしなければよいと思うのだが、大学経営がそこに入ってくると議論が難しくなる。とは言え、高等学校には、学びの動機を大学入試に頼るのではなく、学び自体への興味・関心が動機となるような学習・指導方法の改善が求められている。それは生涯学び続けることが必須の時代に生きる力を身に付けることになる。その意味から「主体的・対話的な深い学び」への転換は極めて重要である。そこで身に付ける力はどういうものであり、大学入学者選抜、大学教育にどうつなげていくのか、高等学校と大学が協力して模索していくことが求められている。「高大接続改革」は大きなチャンスである。

【参考文献】

教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」（平成 25 年 5 月 28 日）

教育再生実行会議第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（平成 25 年 10 月 31 日）

中央教育審議会答申「すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせるために」（平成 26 年 12 月 22 日）

高大接続システム改革会議「最終報告」平成 28 年 3 月 31 日

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年 12 月 21 日）

教育時報 平成 8 年 12 月号 岡山県教育委員会

岡山県高等学校教育研究協議会第二専門委員会報告（平成 28 年 3 月 25 日）「参考資料」

岡山県教育庁高校教育課ホームページ

岡山県立倉敷天城高等学校平成 28 年度学校要覧

岡山県立岡山城東高等学校 SGH 研究開発実施報告書（平成 28 年 3 月）

第 22 回全国進学指導研究大会資料 全国高等学校進路指導協議会（平成 28 年 9 月 29 日）